

ニホンニオケルエンカウンター・グループノジッセ ントケンキュウノテンカイ : 1970-1999

野島, 一彦
九州大学大学院人間環境学研究科教授

<https://doi.org/10.15017/826>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 1, pp.11-19, 2000-03-10. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



日本におけるエンカウンター・グループの 実践と研究の展開：1970-1999

野 島 一 彦

THE PRACTICE AND RESEARCH OF ENCOUNTER GROUPS IN JAPAN: 1970 -1999

KAZUHIKO NOJIMA

The term "Encounter Group" had three connotations in the U.S.A. in 1970's: ① human potential movement, ② small intensive group, and ③ basic encounter group. In Japan, however, the term has been used as ① "basic encounter group", or ② "structured encounter group" since 1970's. In this presentation, the presenter attempts to report the practice and the research of encounter groups in Japan.

Basic encounter group was first introduced in 1969 by Hatase, M. who studied for two years at Rogers, C. R. The first practice of the group was initiated in Kyoto in 1970. Since then, Japan Institute of Person-centered Approach led by Hatase, M. and Fukuoka Institute of Person-centered Approach led by Murayama, S. have been playing central roles in the development of the practice and research of encounter groups in Japan. Those groups have been aimed at variety of population from the general public, junior-high school students, high school students, preparatory school students, university students, nursing school students, kindergarten teachers, school teachers, school nurses, families, parents of children with school refusal, hospital nurses, telephone counselors, business men, to counselors. Nojima, K. et al (1991) have been practicing basic encounter group therapy for patients with schizophrenia.

As far as research presentations are concerned, since the first presentation made by Hatase, M. and Nojima, K. at Japanese Psychological Association in 1971, a number of presentations have been consistently made. Major areas of the research are: ① process study, ② outcome study, ③ facilitator study, and ④ application. The literature concerning encounter groups has been reviewed by Murayama, S. et al. (1979), Kotani, H. et al. (1982), Nojima, K. (1983), Shigeta, M. et al. (1983), Murayama, S. et al. (1987), Shin, E. (1989), Sakanaka, M. (1994), Hayashi, M. (1997), Nojima, K. (1997) and others.

In terms of structured encounter groups, they have been practiced by various people in various formats and in various places since the middle of 1970's. Structured encounter groups have been especially practiced in the field of education. They have been implemented to schools in order to prevent bullying and school refusal and facilitate cooperative class atmosphere and friendship among students. Nabeta, Y. (1991) therapeutically used structured encounter group for clients with social phobia or school refusal.

After the presentation in 1978 made by Kokubu, Y. & Suganuma, K. at Japanese

Association of Counseling Science, a number of studies concerning structured encounter groups have been conducted until present. Major areas of the research are: ① process study, ② outcome study, ③ exercise programs study, and ④ application. The literature review has been done by Nojima, K.(1992).

In the U.S., the practice of encounter groups have been active from 1960's to 1970's, but it has been declining after that and research presentations are scarcely found these days. On the other hand, the practice and research in Japan have been active in past three decades, and we can anticipate that this trend will continue to grow in the future.

Key Words : basic encounter group, structured encounter group, structured group encounter

エンカウンター・グループという用語は、1970年代の米国では、①潜在能力啓発運動全体、②スモール・インテンシブ・グループ、③ベーシック・エンカウンター・グループ、という3つの意味で使用されている。しかし日本では1970年代から、①ベーシック・エンカウンター・グループ、②構成的エンカウンター・グループ(構成的グループ・エンカウンター)、という意味で使用されている。本稿では、日本におけるエンカウンター・グループの実践と研究の展開について述べる。

日本へのベーシック・エンカウンター・グループの導入は、1969年に、Rogers,C.R.のもとで2年間学んだ島瀬稔によって行われた。最初の実践は、1970年に京都で行われた。以後、島瀬を中心とする人間関係研究会、村山正治を中心とする福岡人間関係研究会等がその実践と研究を今日に至るまで継続している。その対象は、一般人、中学生、高校生、予備校生、大学生、看護学生、保母、教師、養護教諭、家族、不登校の子の親、看護婦、電話相談員、企業人、カウンセラー等、多様である。野島ら(1991)は、精神分裂病者を対象として、ベーシック・エンカウンター・グループ的集団精神療法を実施している。

研究発表は、1971年の島瀬、野島による日本心理学会での最初の発表以来、着々と続けられている。研究の主な領域は、①プロセス研究、②効果研究、③ファシリテーター研究、④適用である。研究の展望は、村山ら(1979)、小谷ら(1982)、野島(1983)、茂田ら(1983)、村山ら(1987)、申栄治(1989)、坂中正義ら(1994)、林もも子(1997)、野島(1997)等で行われている。

構成的エンカウンター・グループは、1970年代半ばから日本の各地でいろいろな人達によって、様々な形態で行われるようになった。構成的エンカウンター・グループは、主に教育の領域で実践が盛んに行われている。日本の学校で大きな問題になっているいじめ、不登校等の予防のために、また学級集団づくりや仲間づくりのために導入が行われている。鍋田(1991)は、思春期の対人恐怖症や登校拒否児への治療として構成的エンカウンター・グループを用いて効果をあげている。

研究発表は、1978年の国分康孝と菅沼憲治による日本相談学会での発表以来、着々と続けられてきている。研究の主な領域は、①プロセス研究、②効果研究、②エクササイズ・プログラム研究、③適用である。研究展望は、野島(1992)によって行われている。

米国でのエンカウンター・グループの実践は、1960年代から1970年代にかけて盛んに行われたが、その後は衰退し、研究発表も最近では見られなくなっている。しかし、日本ではこの30年間続いてきたし、現在でも盛んである。そして、今後もさらに盛んになっていくことが予測される。

キーワード：ベーシック・エンカウンター・グループ、構成的エンカウンター・グループ、構成的グループ・エンカウンター

I. はじめに

エンカウンター・グループ (Encounter Group) という用語は、1960年代の米国では、①潜在能力啓発運動全体、②スモール・インテンシブ・グループ、③ベーシック・エンカウンター・グループ、という3つの意味で使用されている(村山, 1973)。

しかし、日本では米国とは少し異なる。日本でエンカウンター・グループという名称が広く知られるようになるきっかけをつくったのは、Rogers, C.R.のもとで2年間エンカウンター・グループの実践と研究を学んできた畠瀬稔による紹介(畠瀬, 1970)である。以後、エンカウンター・グループという用語は急速に広まった。そしてしばらくの間は、エンカウンター・グループと言え、あまり構造化されていない(low structured)ベーシック・エンカウンター・グループのことであった。

ところが1970年代半ば頃から、かなり構造化された(high structured)エンカウンター・グループが実践されるようになった。そして國分康孝(1981)が『エンカウンター——心とこころのふれあい』を刊行し、そのなかで「構成的グループ・エンカウンター」という用語を使って以来、構成的グループ・エンカウンター(構成的エンカウンター・グループ)は多くの人々に知られるようになった。

ちなみにエンカウンター・グループとグループ・エンカウンターはどのように違うのであろうか。筆者は、この種のグループの最も正確な表現は、group encounter groupであると考え。つまり、group encounterが生じるgroupということである。これの前の2つの語を用いればグループ・エンカウンター(group encounter)であるし、後の2つの語を用いればエンカウンター・グループ(encounter group)となる。だから、この2つは基本的には同じであると思っている。

以上のようなわけで日本では、エンカウンター・グループという用語は、①ベーシック・エンカウンター・グループ、②構成的エンカウ

ンター・グループ(構成的グループ・エンカウンター)、という2つの意味で使用されている。

本稿では、1970年から1999年に至るまでの、日本における2つのタイプのエンカウンター・グループの実践と研究の展開についてその概要を述べ、考察を行いたい。

II. ベーシック・エンカウンター・グループ

1. 実践

日本へのベーシック・エンカウンター・グループの導入は、1969年に畠瀬稔によって行われた。最初の全国公募によるワークショップは、1970年8月10日～21日、土日を除く10日間、京都女子大学で通い方式で開催され、33名が参加した。それ以後、畠瀬を中心とする人間関係研究会、村山正治を中心とする福岡人間関係研究会等がその実践と研究を今日に至るまで継続している。前者の1971年度～1999年度プログラム数の推移は次のようである。

'71 = 2, '72 = 5, '73 = 6, '74 = 7, '75 = 15, '76 = 14, '77 = 21, '78 = 17, '79 = 20, '80 = 21, '81 = 24, '82 = 28, '83 = 25, '84 = 28, '85 = 25, '86 = 25, '87 = 18, '88 = 24, '89 = 21, '90 = 23, '91 = 23, '92 = 26, '93 = 23, '94 = 24, '95 = 28, '96 = 29, '97 = 34, '98 = 34, '99 = 40。

1999年度のプログラムとして特徴的なものをいくつかあげると次のようなものがある。女性のための充電エンカウンター・グループ、働く人のためのエンカウンター・グループ、緩和ケアにかかわる人のためのエンカウンター・グループ、“人間関係のなかの私”を見つめるエンカウンター・グループ、教育のためのエンカウンター・グループ経験と人間中心の教育研修会、自己発見への内なる旅——個性との出会いエンカウンター・グループ、第5回国際エンカウンター・グループ等。

エンカウンター・グループの対象は、一般人、中学生、高校生、予備校生、大学生、看護学生、保母、教師、養護教諭、家族、「学校嫌い」の子の親、看護婦、電話相談員、企業人、カウンセラー等、多様である。エンカウンター・グルー

ブは基本的には心理的成長を目的としているが、特異なものとして、野島・五十里他(1991)は、精神分裂病者を対象として、ベーシック・エンカウンター・グループ的集団精神療法を実施している。

2. 研究

研究発表は、1971年の畠瀬(1971)、野島(1971)による日本心理学会での最初の発表以来、着々と続けられている。エンカウンター・グループについての博士論文は筆者が知る限りでは、畠瀬(1990)、巖(1993)、平山(1996)、野島(1998)の4本である。研究の展望は、村山・野島他(1979)、小谷・中西他(1982)、野島(1983b, 1983c)、茂田・村山(1983)、村山・野島他(1987)、申(1989)、坂中・村山(1994)、林(1997)、野島(1997)等で行われている。

これまでの研究の主な領域は、①プロセス研究、②効果研究、③ファシリテーター研究、④適用である。

①プロセス研究は、グループ過程に焦点をあてたものと個人過程に焦点をあてたものがある。グループ過程に焦点をあてた概念化としては、村山・野島(1977)の発展段階説がよく引用されている。林(1989)はこれをもとにしてエンカウンター・グループの発展段階尺度を作成している。個人過程に焦点をあてた概念化としては、野島(1983a)、平山(1993b)のものがある。平山(1993a)は個人過程測定尺度、松浦・清水(1999)は個人プロセス調査用尺度を作成している。

②効果研究は、アンケートを用いたもの、心理テストを用いたもの、面接法によるもの、事例研究法によるものなど、かなり多く行われている。

③ファシリテーター研究は、ファシリテーター体験記、ファシリテーター体験の事例研究、ファシリテーターをめぐる実証的リサーチ、ファシリテーション論、コ・ファシリテーター関係、ファシリテーター養成等がある。野島(1998)は発展段階におけるファシリテーション技法を体系化している。申(1986)はファシリ

テーター関係認知スケールを作成している。

④適用については、一般人、高校生、大学生、専門学校生、教師、養護教諭、看護婦、組織等へのエンカウンター・グループの適用が実際に行われ、それらの事例報告、事例研究が発表されている。

III. 構成的エンカウンター・グループ

1. 実践

構成的エンカウンター・グループ(構成的グループ・エンカウンター)は、1970年代半ばから日本の各地でいろいろな人達によって、様々な形態で行われるようになったが、その背景には、畠瀬(1972)の身体接触を伴う人間関係促進技法の紹介があるように思われる。

人間関係研究会のワークショップのプログラムを見ると、1971年度～1974年度は単にエンカウンター・グループという名称しか使われていない。しかし、1975年度から各ワークショップには特徴を表す名称がつけられるようになり、そのなかに「集中的イメージ・エンカウンター・グループ」(ファシリテーター=東山紘久、谷口正己)というのが登場している。その特色として、「エンカウンター・グループの新しい技法として、here and now(今ここ)の実践的トレーニングをめざし、技術と人間性の統合をはかるグループです。」と述べられている。これはそれまでの話し合い中心のエンカウンター・グループとはかなり違い、high structuredなグループとなっている。その後、1976年度には「禅体験をとまなうエンカウンター・グループ」「TAによるエンカウンター・グループ」、1977年度には「夢のエンカウンター・グループ」、1978年度には「非言語的感受性技法を中心とするエンカウンター・グループ」、1979年度には「フォーカシング(焦点づけ)エンカウンター・グループ」といった形でhigh structuredなグループが毎年行われるようになっていっている。

このような人間関係研究会の流れとは別に、國分・菅沼(1978)は、「EGは参加者にダメージを与えることがある。…このダメージを予防する方法としてExcercise(以下Exと略す)を

主とした structured group を考えたい。」として high structured なエンカウンター・グループを行うようになった。その後、國分 (1981) が『エンカウンター — 心とこころのふれあい』を出版してから、構成的グループ・エンカウンターは急速に広く知られるようになり、実践も盛んに行われるようになった。

また山本銀次も high structured group について多数の実践と研究を重ね、独自のグループを提唱している (山本, 1978)。

構成的エンカウンター・グループは、主に教育 (小学校, 中学校, 高等学校, 大学) の領域で実践が活発に行われている。日本の学校で大きな問題になっているいじめ, 不登校等の予防のために, また学級集団づくりや仲間づくりのために導入が行われている。教育以外では, 企業, カウンセリング研修等で実践されている。構成的エンカウンター・グループは基本的には心理的成長を目的としているが, 特異なものとして, 鍋田 (1991) は, 思春期の対人恐怖症や登校拒否児への治療としてこれを用いて効果をあげている。ベーシック・エンカウンター・グループに比べると, 実践の領域の幅はやや狭く, 実践の量も少ない。

2. 研究

研究発表は, 1978 年の日本相談学会での菅沼・國分 (1978), 國分・菅沼 (1978) の発表以来, 着々と続けられてきている。初期の論文としては, 國分・菅沼 (1979), 福井 (1979), 野島 (1980a), 菅沼 (1983) 等がある。研究展望は, 野島 (1992) によって行われている。ベーシック・エンカウンター・グループに比べると, その歴史が少し短いせいもあるが, 研究は質的, 量的にかなり遅れている。研究の主な領域は, ①プロセス研究, ②効果研究, ③エクササイズ・プログラム研究, ④適用である。

①プロセス研究は, 知り合いのひろがり, 人間関係体験, 体験的事実, 合宿体験等についてのアンケート調査等が行われている。例えば, 片野 (1994) の研究である。また, 事例研究も行われている。例えば, 野島 (1985) の研究で

ある。

②効果研究は, YG, UPI, 進路意識, 自己肯定感, 自己概念等を用いたもの, アンケートを用いたもの等が行われている。例えば, 高田・坂田 (1997) の研究である。

③エクササイズ・プログラム研究では, どのようなエクササイズ・プログラムが「おもしろくて, ためになる」かということを確認していくことが行われる。例えば, 國分・西他 (1987) の研究である。

④適用については, 主に教育の領域が中心であり, その事例研究, 事例報告が多いが, それ以外では, ホームヘルパーの研修, 電話相談員の研修等にも適用が行われるようになり, その研究発表も出始めている。例えば, 野島 (1994), 野島 (1999) の研究である。

IV. 考察

1. この30年間のエンカウンター・グループの米国での衰退と日本での隆盛について

(1) 違いを生ぜしめているもの

米国でのエンカウンター・グループの実践は, 1960 年代から 1970 年代にかけて盛んに行われたが, その後は衰退し, 研究発表は最近では見られなくなっている。しかし, 日本でのエンカウンター・グループの実践は 1970 年以来この30年間続いてきたし, 研究発表も毎年行われている。

何がこのような違いを生ぜしめているのであろうか。その理由の 1 つは, 米国ではこの30年のうちにエンカウンター・グループを積極的に推進してきた指導者達が次々と亡くなっていった (例えば Rogers, C.R. は 1984 年に亡くなっている) のに対して, 日本ではエンカウンター・グループを推進してきた指導者達が現在も現役で実践・研究に携わっているということもあるであろう。

その理由の 2 つめは, 米国は個人主義的社会であるのに対して日本は集団主義的社会であるとよく一般的に言われるが, このようなことも関係しているのかもしれない。つまり, エンカウンター・グループのような集団という構造

は、米国よりは日本の方が人々に自然になじみやすく、根つきやすいのかもしれない。

(2) 日本での隆盛の理由

ところで、日本でエンカウンター・グループが隆盛である理由としては、次のようなことが考えられよう。第1は、日本のカウンセリングの歴史をみると、最初はRogersのクライアント中心療法がその主流であったし、現在も多くの心理臨床家はその影響を受けているが、そのような風土のなかで、クライアント中心療法の延長線上にあるエンカウンター・グループは多くの心理臨床家が取り入れやすかったのであろう。

第2は、1970年に創立された人間関係研究会、福岡人間関係研究会といったエンカウンター・グループを積極的に推進していく団体の存在が大きいように思われる。これらの団体が毎年、プログラムを提供し続けていることが、エンカウンター・グループの広まりに貢献している。

第3は、手前味噌的であるが、筆者が1980年から毎年、エンカウンター・グループを含むわが国の集中的グループ経験に関する文献リスト〔最初のは野島(1980b)、最新のは野島・坂中(1999)]を作成していることも影響しているかもしれない。

2. 実践をめぐる

(1) 学校教育への導入の留意点

エンカウンター・グループはいろいろな領域で実践が行われるようになってきているが、とりわけ学校教育(小学校、中学校、高等学校、大学、専門学校等)での実践が最も活発である。最近の日本の学校は、不登校、いじめ、校内暴力、非行、学級崩壊等の問題に悩んでいるが、それらへの1つのアプローチとして、エンカウンター・グループは有効である。今後もさらに積極的に導入が行われていくことと思われるが、その際に留意すべきことは、(悪い意味での流行として)エンカウンター・グループのことをよく知らないままに安易に導入することがないようにということである。

特に構成的エンカウンター・グループについては、本が次々と出ており、多くの教育関係者が関心を持つようになってきた。それで、本を読んだだけでいきなり学級で実施するような危険性が高まっている。エンカウンター・グループはかなりパワフルなグループ体験であるだけに、きちんとした活用指針〔例えば野島(1995)]に基づいて導入する必要がある。

(2) 今後の導入が期待される領域

これまで殆どあるいは全く導入が行われていないが、今後それが期待される領域としては次のような領域がある。第1は、高齢者福祉に関連した領域である。先ずは、高齢者へのエンカウンター・グループの導入がある。高齢者にとってエンカウンター・グループを体験することは、いい経験になるように思われる。次に、高齢者を援助する人達の研修としてエンカウンター・グループは有益である。

第2は、ターミナル・ケアに関連した領域である。一方では、ターミナル期にある人達にとってエンカウンター・グループは意義がある。他方では、そのような人達のケアに携わるスタッフにとっても、エンカウンター・グループは貢献できる。

第3は、異文化間交流に関連した領域である。これまでも、日本に留学している学生と日本人学生の友好と相互理解をめざしてのエンカウンター・グループが行われている(平井, 1996)。また人間関係研究会では、国際エンカウンター・グループを継続的に行っている。

3. 研究をめぐる

(1) ベーシック・エンカウンター・グループの課題

ベーシック・エンカウンター・グループについては、この30年間に膨大な研究が行われてきた。そして、プロセスやファシリテーションに関する概念化、その測定用具の作成等もかなり進んできた。しかし、次のような課題も残っている。

第1は、プロセスの測定用具は作成されたものの、それを用いての研究の蓄積が殆どなされ

ていない。せっかく道具ができたのだから、今後それらを積極的に活用した研究（リサーチ）がなされることを望みたい。個人プロセスとグループ・プロセスの関連をみるような研究もほしいところである。

第2は、効果研究は様々な測定用具を用いての研究がかなり蓄積されてきているが、それらの結果から何が言えるのかが、あまり整理されていない。それらを総合的に考察するような研究が必要である。さらに、効果をめぐっては、効果測定スケールの決定版のようなものがまだない。もう30年にもなるのだから、そのようなものができてほしいのではと思われる。

第3は、ファシリテーションについての測定用具は開発されたものの、それを用いての研究がすくない。この道具単独での研究とともに、これとプロセスとを関連させた研究、これと効果を関連させた研究等、今後いろいろな研究が展開されていくことを期待したい。

(2) 構成的エンカウンター・グループの課題

構成的エンカウンター・グループは、ベーシック・エンカウンター・グループに比べて、研究の量そのものがかなり少ない。だから、もっともっと研究の蓄積をすることが必要であるが、その際の課題としては、次のようことを指摘できよう。

第1は、プロセス（個人プロセス、グループ・プロセス）について実証的研究は少し行われているが、それだけでは不十分である。もっと細やかにプロセスを理解するためには、野島（1985）の研究のような事例研究が欠かせないであろう。

第2は、効果研究をより精密に進めていくには、アンケート、心理テストといったアプローチだけでは、不十分である。ベーシック・エンカウンター・グループで用いられている面接法、事例研究法を取り入れていく必要がある。

第3は、エクササイズ・プログラム研究では、どのようなエクササイズ・プログラムが、どのような状態の、どのような人に、どのような点で、最も有効であるかを明らかにしていく必要がある。これに関する研究は、絶対的に不足し

ているが、とても大事であるので、もっと取り組んでほしいと思う。

第4は、ファシリテーター（リーダー）研究は、これまで殆ど取り組まれてきていないが、これはきわめて重要な研究である。エクササイズ・プログラムを設計し、それを実行していくのはファシリテーター（リーダー）であり、その上手下手が効果に最も影響する。構成的エンカウンター・グループを担当してきたベテランの人達は、そのあり方について試行錯誤しながら貴重な経験を積んできているが、それらをファシリテーター（リーダー）論として言葉にしてほしいと願う。

(3) 2つのタイプの比較研究

ベーシック・エンカウンター・グループと構成的エンカウンター・グループは、その目的（自己理解、他者理解、自己と他者との深く親密な人間関係）は同じでも、その方法（low structured, high structured）がかなり異なっている。この2つのタイプは、それぞれ一長一短がある。だから、この2つのタイプの比較研究を進めて、それぞれの特徴をより鮮明にすることが必要である。野島（1989）の研究等、若干の研究はあるが、もっとほしい。それとともに、この2つのタイプの有機的連携をどのようにしたらよいかについても研究をしていくことが望まれる。

文 献

- 福井康之（1979）教員養成教育のカリキュラムの一案としての人格成熟促進プログラムによる授業の効果とその検討 — POI（自己実現尺度）による効果測定を手がかりにして、愛媛大学教育学部「教科教育の体系的な研究」, 12,21-37.
- 島瀬 稔（1970）エンカウンター・グループについて, 教育と医学, 18(1),31-37.
- 島瀬 稔（1971）エンカウンター・グループに関する研究(1), 日本心理学会第35回大会発表論文集, 669-670.
- 島瀬 稔（1972）身体接触を伴う人間関係促進

- の一技法(改定増補), 人間関係研究会, 刊行資料, No.1.
- 梶瀬 稔(1990) エンカウンター・グループによる心理的成長と教育, 京都大学博士論文.
- 林もも子(1989) エンカウンター・グループの発展段階尺度の作成, 心理学研究, 60(1), 45-52.
- 林もも子(1997) 日本におけるエンカウンター・グループの実証研究の方法論に関する考察, 東京大学学生相談所紀要, 10,24-31.
- 平井達也(1996) 異文化間における親密化促進のためのプログラム開発とその分析—エンカウンターグループをベースに, 九州大学大学院教育学研究科修士論文.
- 平山栄治(1993a) エンカウンター・グループにおける参加者の個人過程測定尺度の作成とその検討, 心理学研究, 63(6),419-424.
- 平山栄治(1993b) 参加者の個人過程の展開からみたエンカウンター・グループの発展段階, 心理臨床学研究, 11(2),164-173.
- 平山栄治(1996) エンカウンター・グループにおける個人の経験の過程とそれがもつ心理的成長への意義に関する研究, 九州大学博士論文.
- 巖岩秀章(1993) エンカウンター・グループにおける人格変化に及ぼす「受容」と「対決」の影響についての研究, 国際基督教大学博士論文.
- 片野智治(1994) 構成的エンカウンター・グループ参加者の体験的事実の検討, カウンセリング研究, 27(1),27-36.
- 國分康孝(1981) エンカウンター—心とこころのふれあい, 誠信書房.
- 國分康孝・西 昭夫・村瀬 旻・菅沼憲治・國分久子(1987) 大学生の人間関係開発のプログラムに関する男女の比較研究, 相談学研究, 19(2),71-83.
- 國分康孝・菅沼憲治(1978) 大学生の人間関係開発のプログラムに関する研究(その2)—Structured Groupの内容に関するPilot Study, 日本相談学会第11回大会発表論文
- 集
- 國分康孝・菅沼憲治(1979) 大学生の人間関係開発のプログラムとその効果に関するパイロット・スタディ, 相談学研究, 12(2),74-84.
- 小谷英文・中西一夫他(1982) 80年代のグループ・アプローチ, 臨床的グループ・アプローチ研究会「グループ・アプローチ」, 1,41-72.
- 松浦光和・清水幹夫(1999) Basic Encounter Groupの個人プロセス調査用尺度の作成, カウンセリング研究, 32(2),182-193.
- 村山正治(1973) エンカウンター・グループ運動, 教育と医学, 21(8),74-80.
- 村山正治・野島一彦(1977) エンカウンターグループ・プロセスの発展段階, 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 21(2),77-84.
- 村山正治・野島一彦・安部恒久(1987) 日本におけるパーソン・センタード・グループ・アプローチの現状と課題, 九州大学心理臨床研究, 6,169-177.
- 村山正治・野島一彦・安部恒久・岩井 力(1979) 日本における集中的グループ経験研究の展望, 実験社会心理学研究, 18(2),139-152.
- 鍋田恭孝(1991) 構成化したエンカウンター・グループの治療促進因子について—思春期の神経症状態とくに対人恐怖症および慢性不登校児に対する治療を通じて, 集団精神療法, 7(1),13-20.
- 野島一彦(1971) エンカウンター・グループの基礎的研究, 日本心理学会第35回大会発表論文集, 671-672.
- 野島一彦(1980a) ゲーム・エンカウンター・グループの事例研究, 福岡大学人文論叢, 12(2),419-544.
- 野島一彦(1980b) わが国の「集中的グループ経験」に関する文献リスト(1970-1980), 九州大学教育学部心理教育相談室紀要, 6,69-93.
- 野島一彦(1983a) エンカウンター・グループにおける個人過程—概念化の試み, 福岡大学人文論叢, 15(1),33-54.

- 野島一彦(1983b)日本における集中的グループ経験の「過程研究」展望(上)—1962年～1983年6月,福岡大学人文論叢, 15(2),389-428.
- 野島一彦(1983c)日本における集中的グループ経験の「過程研究」展望(下)—1962年～1983年6月,福岡大学人文論叢, 15(3),759-792.
- 野島一彦(1985)構成的エンカウンター・グループにおける High Learner と Low Learner の事例研究, 人間性心理学研究, 3,58-70.
- 野島一彦(1989)構成的エンカウンター・グループと非構成的エンカウンター・グループにおけるファシリテーター体験の比較, 心理臨床学研究, 6(2),40-49.
- 野島一彦(1992)文献研究の立場からみた構成的グループ・エンカウンター, 國分康孝編, 構成的グループ・エンカウンター, 誠信書房, 23-34.
- 野島一彦(1994)ホームヘルプ協力員の人間関係トレーニング—構成的グループ・エンカウンターによる,福岡大学人文論叢, 26(2),355-389.
- 野島一彦(1995)エンカウンター・グループの活用指針,岡堂哲雄・平尾美生子編,現代のエスプリ別冊,スクール・カウンセリング,技法と実際,至文堂, 53-61.
- 野島一彦(1997)日本におけるベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーション論の展望,九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 41(1),63-70.
- 野島一彦(1998)エンカウンター・グループの発展段階におけるファシリテーション技法の体系化,九州大学博士論文.
- 野島一彦(1999)電話相談担当者の構成的エンカウンター・グループ,日本人間性心理学会第18回大会発表論文集, 92-93.
- 野島一彦・五十里瑞枝・市川佐栄子・堀部とみ子・手嶋千恵子・小林由紀子・牧 聡(1991)デイケアにおける「心理ミーティング」導入の試み—その効果と意義をめぐる検討, 集団精神療法, 7(1),49-54.
- 野島一彦・坂中正義(1999)わが国の「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献リスト(1998),九州大学心理臨床研究, 18,135-150.
- 坂中正義・村山正治(1994)日本におけるエンカウンターグループ研究の展望,九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 38(2),143-153.
- 茂田みちえ・村山正治(1983)日本における「集中的グループ経験」の効果研究に関する文献集録—1979～1983および1971～1978の追録,九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 28(1),63-72.
- 申 栄治(1986)エンカウンター・グループにおけるメンバーのファシリテーター関係認知スケール作成の試み,心理学研究, 57(1),39-42.
- 申 栄治(1989)エンカウンター・グループにおけるリサーチの今後の方向性に関するいくつかの考察,九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 34(1),47-55.
- 菅沼憲治(1983)構成的グループ・エンカウンターの研究,千葉商科大学紀要, 20(3・4), 15-42.
- 菅沼憲治・國分康孝(1978)大学生の人間関係開発のプログラムに関する研究(その1)—大学生の友人関係形成欲求に関する調査,日本相談学会第11回大会発表論文集.
- 高田ゆり子・坂田由美子(1997)保健婦学生の自己概念に構成的グループ・エンカウンターが及ぼす効果の研究,カウンセリング研究, 30(1),1-10.
- 山本銀次(1978)自己開発とソフトユニット,東海大学出版会.